

住吉詣で



長谷川修

住吉詣で 長谷川修

六興出版



長谷川 修（はせがわ・おさむ）
 一九二六年、山口県下関に生れる。
 一九四八年、京都大学工学部卒業。
 著書として「ふうてん学生の孤独」
 （一九六九年、新潮社）「まぼろし
 の風景画」（一九七二年、新潮社）
 「遙かなる旅へ」（一九七四年、新潮
 社）「古代史推理」（一九七四年、新
 潮社）「舞踏会の手帖」（一九七五年、
 人文書院）「幻の草薙剣と楊貴妃伝
 説」（一九七八年、六興出版）「近江
 志賀京」（一九七八年、六興出版）
 がある。一九七九年五月一日死去。

長谷川修作品集

住吉詣で
すみよしもよう

昭和五十五年二月二十五日印刷
 昭和五十五年三月初刷発行

著者 長谷川修

発行者 賀来壽一

印刷 三秀舎

製本 中央精版

発行所 六興出版

文京区水道二一九一二

振替東京一ノ九二四四八

© 1980 Hasegawa

住吉詣で・目次

住吉詣で	5
ささやかな平家物語	47
楊貴妃	85
空壺物語	137
崇神記	193
長谷川修さんのこと（野呂邦暢）	247

カバー原画・麻田鷹司「松嶋図」部分

住吉詣で

ある日、私は近道をするため、露地裏の小路を通り抜けていると、路に沿ってほんの二、三段の高さに組まれている石垣の一部が取り除かれて、水道工事の穴が掘られていた。

あたりの地面は、漏水にすっかりぬかるんでいる。ぬかるみを避けながらその傍を通るとき、何気なく私は、掘られた石垣の穴を見た。石垣の組み石を取りのけたあとに、ポツカリと穴が空いている。その穴は破裂した水道管からの漏水で、かなり奥までえぐられていたが、泥の色がさながら炭の粉を混ぜたように黒い上に、その穴の中には、まるで痛々しい神経繊維のような真白いひげ根が、むき出しにされたまま無数に垂れ下っていた。それを目にした途端、思わず私はギョツとして、気味悪さのあまり、背筋までが一瞬すくみ上げるほどだった。

勿論その少し先には木が植えられていて、木の根の細かいレース編みのような根毛が露出しているだけのことだったが、たしかに泥の色の黒さも手伝ってはいたにせよ、私にはその穴に垂れる末梢神経のような根毛が、何とも気味悪いものに見えたのだ。

もともと私は立木の枝ぶりを眺めるのが好きで、とくに細かい梢を網の目のようにひろげている冬木立など、飽かず好んで眺めていたりする。木というものは元來、空中に枝をひろげている

分だけ、ちょうど地下にも同じように根をひろげている。見方によれば、枝先の梢など、地下の根毛とさして差はないだろう。一本の木を逆様に見るならば、地上の幹や枝をかりに根と見立て、代りに地下の根茎の方を枝や梢と思ってもいいだろう。つまり、その木は空中に根をひろげ、地下の世界に枝を延ばしているというわけだ。

すると枯木立の梢をこよなく愛するこの私が、それと本質的には差違のない地下の根毛を、何故にそれほどまでに気味悪がったのか？

実際、むき出しにされた真白なひげ根を目にしたときの気味悪さは、もはや不気味というよりも、何か恐怖に近いものだった。私自身の頭の中にも、漏水のえぐったその黒土の穴とそっくり同じような穴があいていて、私はいま、自分の脳髓の中にあいた穴を、まざまざと見せつけられている――。私の脳髓の内部には、すでに老化が進んでボロボロになったあちこちの組織壁の隙間に、もはや完全に欠落した鬆のような陥没腔があき、その閉ざされた暗い穴の中には、ささくれ立った神経繊維の束が、無数に垂れ下っているだろう。私の恐怖は実のところ、私自身の大脳の内部にいた、そんな空虚で真暗な穴を想像したからなのだ。

すでに五十歳を過ぎてしまった私は、もう大分前から自分の頭脳に、すっかり自信を失っている。私はもはや眼鏡の助けを借りなければ、字も読めなくなっているし、とくに記憶力の減退ぶりがたるや、まさに目を掩うばかり、錯誤や錯覚などはしよっちゅうのことだ。こんな有様では、自分のやっていることは間違いだらけではないのか、と空恐しくなってしまうし、時には大変な

思い違いをしていることに気がついて、恐怖感が稲妻のように全身を走り抜けることもある。

私の大脳はもはや大根の鬚のように隙間だらけで、肝腎な記憶はすべて真暗な陥没腔に落ち込んでしまひ、神経細胞の繊維は滅茶苦茶に寸断されて、垂れ下った電線のように暗い穴の中で揺れている。そして時折りそんな電線が互いに接触し、すると一瞬、緑色の閃光が暗腔の内部を照らし出すのだが、その短絡の火花が生み出すかりそめの妄想を、私は何か直感のひらめき、あるいは未知の発見へ誘う発火現象とさえ、錯覚しかねないような節すらあるのだ。

穴といえ、私は最近ほんのちよつとしたことがきつかけで、私の足許にボツカリと大きな穴があき、その衝撃から現在もまだ完全に立ち直れないでいる。その穴は奈落の底へ向う、実に黒黒として果てしない穴なのだが、私は足許の奈落の深さに見入りながら、そのきつかけになった些細なことが、その実私にとつてのつぴきならぬものであったことに、今更の如くに驚くのだ。つまり、そんな奈落の深みの不気味さもさることながら、私の云わばアキレス腱に当る部分を衝かれると、ほんのちよつとしたことでも私の死命すら制しかねないという事実には、私は愕然とするのである。

もともと私は若い時分から、というより既に幼時の頃から、とかく何でもないようなことがすぐに悲しみに繋がったり、あるいはほんの些細なことで気分が重く沈み、自分のあいだ憂愁の底で鬱ぎ込んでゐる、といった状態に陥りがちの体質だった。そんなとき私の内面には、憂鬱な思

いに閉ざされた暗い空の中から、悲しみが淡い綿雪のようなものになって、しきりに降りかかっている。だがその悲しみの淡雪も、暫く降るにまかせてそのままそっと放置しておけば、そのうち私の内面にうつすらと積もり、ようやく雪の降りやんだあとの空は、もはや空虚で何もない、どこまでも透き通った虚無の空間がひろがっている。そして地表に薄く積った雪は、間もなく溶けて私の心の内壁に染み入り、その内壁の表面に、目に見えないほどのごく薄い被膜を形成する。だがそういう被膜がこれまで限りなく積み重なり、おかげで私の心の内壁は、少くとも誰しもが気を滅入らせてしまう虚無感といったものに対してだけは、厚い免疫被膜を作り上げてしまった。だから、奈落の暗黒世界などといっても、それは私にとって、何かお馴染みの世界のような感じなのだ。

のみならず私はその「虚無」なるものに対して、一ぱしの理論体系を組み上げ、要するに人生とは、この虚無と如何に馴れ合うか、云わば虚無相手の道化芝居だ、といった人生観すら抱くに至った。相手が虚無であれば、到底最初から勝負などない。須くすべては滑稽に、例えばドン・キホーテの如く、あるいはチャップリンのように、あくまで涙が出るほどまで滑稽に――、それが私の、もはや揺がぬ人生観であった。勿論そうなるまでには、私の内面に限りなく雪が降り続け、そうして何百層何千層という悲しみの薄膜の堆積があった……。

従って私の足許にポツカリ奈落の穴があいたくらいのもので、何も私は些かもたじろぐことはないわけだし、また今更そんなものは何でもない筈であった。何ならチャップリンみたいに奈落

の崖っ縁に取りついて、今にも落っこちそうに目を白黒させてみせる——そんな滑稽な演技すやられそうだった。

だが一体、誰に見せるために、そんな演技をやる必要があるのだろう。私自身に余裕があることを、とくと他人に見せつけておきたいからなのか？　だが、誰も私の演技など面白がらないだろう。それを面白がっているのは、ただ自分自身だけ——。そして、私が滑稽な演技をし、且つそうまでして余裕のあるところを見せつけたがっているのは、他の誰に対してでもなく、ほかならぬこの私自身に対してであること、つまりそれは、あまりにもたわいなさすぎるほどのことだったのだ。そうとわかれば、これこそまさに滑稽きわまることであつた。私はその一人芝居の滑稽さに笑い転げ——、とはいえ実際には笑うどころか、まさに五十歳のむつかしい顔をして、逆に腹を立てていた。これこそ五十歳というものである。結局私はあらゆる事が億劫になり、すべてが面倒臭くなった。

ちやうどそんな心理状態の最中、私の肉親の一人が死んだ。だが私はその肉親の死に接してさえ、自分でも驚いてしまうほど、些かの感情も動かなかつた。死に伴う儀礼のわずらわしさは勿論、死者に対する悲しみ、それから死そのものに対してすら、何もかも面倒臭い。——私はきわめて不機嫌になった。足許にあいた穴に対して、肉親の死に対して、私は憂鬱になったのではなく、ただ不機嫌になった。

私は眼が薄くなつたと云い、記憶力がさっぱり駄目になつたと嘆いてみせる。だが本当にそれ

を嘆いているのか？ いやいや、真情は全く逆である。老眼で字が読みづらくなれば、何も無理をしてまで読むこともない。物忘れが激しいといっても、すぐ忘れるようなことは、最初から憶えていても仕方がないことなのだ。そして五十歳という年齢は、そんなことではビクともしない。この世に半世紀ばかり生きて来て、この現実世界でのことはあらかし知っている。もはやどんなことが起ろうと、そうあわてふためくこともない。そういう意味では五十歳という年齢は、傲然たる自信を持っている。その自信は、まず少々のことでは崩れはしない。だがそれは、全く思いもかけないところから崩れ出す。そして、思いもかけないところから崩れ出すというところに、五十歳の顔がある。憂鬱ではなく、ただ不機嫌になる顔があるのだ。

——ある晩、魘^うなされるほどの夢を見た。それは私が勝手放題に喋った妄言蜚語の類いの責任を問われて、閻魔王のような鬼から、あらゆる刑罰で責め立てられていた夢だったが、目を覚ましたあと、さすがに全身脂汗をかいていたものの、その恐ろしさの大半はもうあらかし忘れていて、ただ恐ろしい夢だったという記憶が残るだけだった。だがその夢の中で一つだけ、前後の状況はさっぱり思い出せないが、黒い海の中に赤い鳥居の建っている光景が出て来て、そこだけ妙にはっきり憶えているのだ。黒い海といっても、それこそ漆器の墨を流したような真黒な海で、勿論空も真暗であり、そういう暗闇の世界にひろがる海の上に、ただ一つ、目も鮮やかな真赤な鳥居が建っている。そのほかには何一つ見えないのだが、その鮮烈な朱色は今でもはっきり記憶

に残り、それは深海の底から跳ね出た真赤な海老の色、あるいは暗黒世界の底で体腔を開いたり閉じたりさせている真赤ないそぎんちやくを想わせたりする。

一体、夢の中の赤い鳥居には、どんな意味があるのだろうか？ 真黒い海や空の暗黒世界は、かに私の脳髓の内部にあいた穴の世界だと解しても、その真赤な鳥居は私の潜在意識の中で、どのような願望を表徴しているのであろうか。

私は戯れに、夜、真暗な中で鏡の前に立ち、不意に電灯を点滅させて、一瞬鏡に映る私の額の部分に、赤い鳥居の残像がかすかに浮かんでいるのではないか、などと試してみるし、また街など歩いていて、何となく怪訝そうな表情でこちらを見ている人がいれば、私はすぐさまその人に声をかけ、「あなたはいま、私の額の上に何を見ました？ 真赤な鳥居のマーク、ね、そうでしょう？……」と、念を押してみたくなる。

赤い鳥居といえは、さしずめ稲荷の鳥居ということになりそうだが、私の鳥居は暗い海中に建っている。その海が墨の海といった印象を受けるところから、それを住吉の墨ノ江の海、——そうして私はその鳥居を、住吉神社の鳥居だという風に想像しているのだ。もちろん住吉神社の鳥居が赤く塗られている筈はないのだけれども。

私の住む下関には、三大住吉の一つ、有名な長門一ノ宮の住吉神社が建てられている。私はこの住吉の社を、私の魂が生れ出たところだと考えている。本州西端の関門海峡に沿う下関という土地は、むかし穴門と呼ばれていたが、この穴門とは、彼岸の世界に向う入口という意味らしい。

私はこの街に生い育ち、学生時代の数年間を除いて、結局この地から外へ出ようとしなかったが、自身の生れた故郷の内ではこれまでの生涯を過ごしながら、常に自身の帰り行くべきところを求めている。故郷の中で自分の故郷を捜す——おそらく私の魂は、母親の胎内から生れたというよりも、母親の胎内が繋がる先に住吉の社があり、その住吉の社の背後にポツカリ穴があいていて、その穴の中からこの現実世界へ生れ出ただろう。だから私自身の故郷は穴門の彼方にあり、私が死ねば当然、私の魂はそこへ帰って行くだろう。

長門一ノ宮の住吉神社は、古墳とおぼしい小丘の森に建てられている。森の中には樹齡千年以上という巨木があり、現在は完全に朽ち果てて、わずかに幹の空洞の部分が残る株だけになっているが、云い伝えによると武内宿禰の植えた樟かしわだということだ。私はその巨木の残骸に限りない愛着を感じ、時折りそこへ出掛けては、すっぽりとその空洞に身をひそめるのだ。空洞の中に坐り込んでじっと目をつぶっていると、そこから私の帰り行くべき世界が遙かに眺められそうな気になるのである。

私は現在、下関の郊外にある水産関係の大学の教師をしている。山陰線で下関駅から五つ目の駅で、そこへ通うのに列車を利用しているが、ある日、駅の階段を上って行くと、うっかり取り違えて山陽線のホームへ来てしまった。一旦電車の中に入り込み、その間違いに気づいたとき、自動ドアが開ざされてしまった。しかし何もあわてる必要はなく、山陽線と山陰線とは次の幡生はたぎ駅